2002年度上期の農協貯金動向

1．はじめに

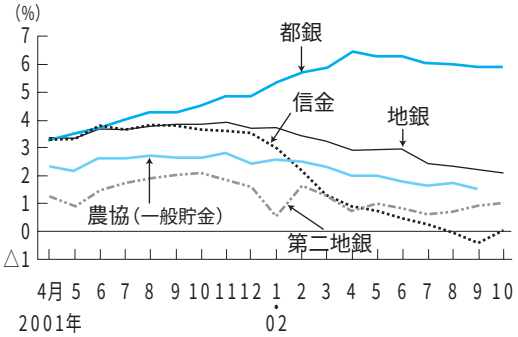
農協貯金の前年比伸び率は，2001年11月末の3.0%から徐々に低下する傾向にある。02年度上期は3月末の2.0%から9月末には0.9%となった。

貯金利用者別にみると，一般貯金（農協貯金全体から公金貯金，金融機関貯金を除いたもの）の伸び率は，02年３月末の2.3%から９月末の1.5%へと低下している。公金貯金は02年４月からの定期性預貯金に対するペイオフ凍結解除の影響により，３月末以降前年比減少となっている。以下では，農協貯金の動向について，他業態と比較しながら分析することにする。

2．個人預貯金の動向

業態別に個人預貯金(注)の前年比伸び率をみると，2001年度下期以降，郵便局定額貯金の満期金流入が減少したことにより，都銀以外の業態では徐々に伸び率が低下している（第１図）。都銀はペイオフの影響で信用力の低い金融機関から資金が流入し伸び率が上昇したが，４月以降は流入も収まり伸び率は低下している。

第１図　業態別個人預貯金の前年比伸び率



資料　「農協残高試算表」,日銀ホームページ
（注）1．農協は一般貯金（貯金－公金貯金－金融機関貯金）。
2．農協は末残，それ以外は平残。なお農協のデータは9月末まで。

農協については，農業経営を巡る環境悪化，景気低迷による農外所得の減少等により，貯金財源は厳しい状況が続いている。そうしたなかで，郵貯満期金の流入減少が伸び率低下に影響しているものといえよう。

02年９月の伸び率は，都銀が5.9%と最も高い。地銀（2.2%），農協（1.5%），第二地銀（0.9%），信金（△0.4%）の伸び率の格差はやや縮小する傾向にある。なお第二地銀は８月以降伸び率がやや上昇している。信金については８，９月と前年比減少となったが，10月は増加へと転じている。信金の伸び率が低い要因としては，他業態への預け替えによる資金流出もあるものとみられる。

個人預貯金の種類別動向をみると，ペイオフにより，いずれの業態においても流動性預貯金の伸び率が上昇し，定期性預貯金はマイナスとなっている。流動性は02年３月にかけて大きく上昇し，４月以降もほぼ横ばいで推移している。９月は農協19.4%，都銀32.9%，それ以外の業態も20%台の高

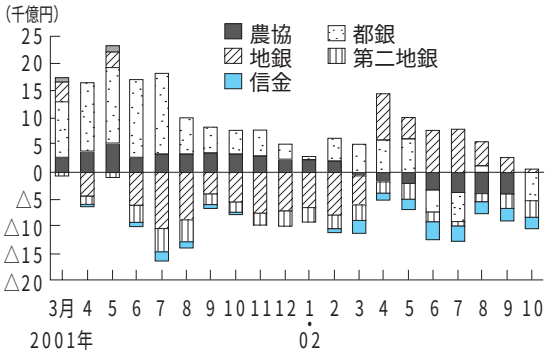
い伸びとなっている。

（注）　農協は一般貯金のデータであり，種類別には個人以外も含んでいる。

３．公金預貯金の動向

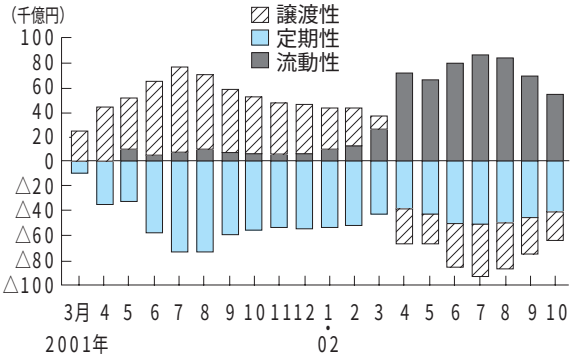
農協の公金貯金は2002年３月末以降前年比減少となっている（第２図）。また他業態では第二地銀，信金が減少で推移している。地銀は４月以降前年比増加となり，ペイオフによりいったん流出した預金が，指定金融機関の多い地銀に再流入しているものと思われる。

第2図　公金預貯金の前年比増減額



資料　第1図に同じ
（注）　データには譲渡性預貯金を含む。なお農協のデータは9月末まで。

第3図　国内銀行の公金預金の前年比増減額



資料　日銀ホームページ

国内銀行における公金預金の種類別動向をみると（第３図），01年度中は定期性預金から譲渡性，流動性預金へのシフトがみられたが，02年４月以降は流動性の増加幅が急激に拡大する一方，譲渡性は減少している。ただし，流動性の増加幅は８月以降徐々に縮小する傾向にある。

４．おわりに

2002年４月以降，農協の個人貯金は郵貯からの資金流入が減少したことで増加幅が縮小している。また公金貯金はペイオフの影響により前年比減少で推移している。

当初03年４月に予定されていたペイオフの全面的な凍結解除により，流動性預貯金に積み上がった資金は再度大きく動くことが懸念されていた。しかし，決済性預貯金に対するペイオフが05年４月まで延期されたことで，それはある程度払拭されるものと考えられる。

こうしたなかにあって，02年度下期以降は農協への他業態からの資金流入が減少すること，また所得環境の悪化から生活資金に充てるための貯金の取り崩し等により個人貯金の伸び率は低下するものと思われる。また個人利用者，地方公共団体ともに金融機関に対する選別意識が高まっていることから，今後も金融機関の信用不安等に伴う資金移動が農協貯金の増減に影響するものと考えられる。

（研究員　長谷川晃生・はせがわこうせい）